

演繹的学びから帰納的学びへ

平岡 祥孝

厚生労働省・文部科学省両省の調査によれば、来春卒業予定の大学生就職内定率（一月一日時点）は七二・二％で、前年同期比四・七ポイント増であった。北海道・東北地区は六八・五％であり、同五・六ポイント増であった（『北海道新聞』二〇一六年一月一九日付朝刊）。ちなみに道内学生の就職の特徴が地元志向であることは、周知の通りである。

札幌市が二〇一六（平成二八）年一月に発表した「地元就職促進施策検討調査」（札幌市内一五大学に在籍する大学四年生と大学院修士課程二年生を対象）によれば、希望・予定する勤務地では「札幌市内」は文系男子六七・〇％、文系女子六六・二％であった。さらに「札幌市以外の道内」を加えると、文系男子八八・三％、文系女子八〇・三％となり、理系男子五七・一％を大きく上回っている。

また就職先選定時に「特に重視する」項目は「企業等の組織の雰囲気や社風が自分にあっている」で五六・七％と半数を超え、「賃金が高い、福利厚生が充実している」「三二・七％を二〇数ポイント上回っていた。「大学で学んだ専門知識が活かされる」一九・九％、「企業に知名度がある、または企業規模が大きい」九・四％、「グローバルな仕事ができる七・六％であった。これら後者三つの数字は見方によれば、お寒い数字と言えるかもしれない。

要するに「お金」より「居心地のよさ」を求め、大競争を避けての勝手知ったる地元が安心ということか。とりわけ文系学生の地元志向は強い。グローバル社会の到来が告げられて久しいものの、北海道の若年層の意識は地域社会重視と言っても過言ではない。グローバル人材養成を声高に叫ぶ識者や企業経営者にとつては、不都合な真実かもしれない。チャレンジ精神やハングリー精神を求める意見に従うならば、甘いと言えはそれまでか。

もちろん筆者とて、グローバル人材養成の必要性は否定するつもりはない。だが、言い換えるならば地元志向は、道内には若年層向けの雇用の場が一定程度存在することの証左でもある。皮肉めいて言えば地域創生の視点からは、札幌市は言うに及ばず北海道にとつては望ましいことだ。

願わくは同じ職場で長く働いてもらいたいものである。キャリアアップやキャリアチェンジ等々の浮かれた言葉、あるいは華麗なる転進を叶える幻想を与えるかもしれない転職市場に引き込まれないようにしてもらいたい。ほろ苦い私学人生を何とか生きてきた筆者の独断と偏見によれば、コスト・パフォーマンスが流行の世の中にあっても、充実した仕事人生の道は、実績と信用の積み重ねしかないのではないか。誠実に生きることだ。

キャリアとは毎日の仕事への取り組み方や

姿勢、さらに飛躍して言うならば仕事人生の生き方が、自分自身のキャリアの基盤になるのではないだろうか。それは決して促成栽培では実現できるものではなく、地道に手間隙かけなければならぬ有機栽培と言える。タテ社会の日本型組織では、簡単に新人を認めないものである。

筆者が懸念する点は、就職活動が短期化するならば、その一方で早期離職の危険性が高まるのではないかとということである。学生が企業や仕事内容に関して十分理解することなく入社したならば、瞬く間に行き詰ってしまい、最近の若者の特徴の一つでもある耐性の弱さともあいまって、離職率が高まる恐れもある。厚生労働省が公表した「新規卒業者の離職状況」によれば、二〇一三年三月に大学を卒業し、三年以内離職した就労者の割合は三一・九％であった（『大学新聞』二〇一六年一月一〇日付）。離職者は約三人に一人の割合である。

とりわけ職場の人間関係に不安を持っている内定学生は決して少なくはないと、筆者は推察している。演繹的な学びに慣れソシャールネットワーク（SNS）に過度に依存する学生生活から、帰納的に仕事を学んでいくために、フェイス・トゥ・フェイスのコミュニケーションが重視される仕事生活に向けて、円滑に移行する準備が必要である。

打算や思惑はたまた損得勘定で動く「感情の動物」が構成するタテ社会をしたたかに生き抜いて、ささやかであっても仕事を通して夢や希望を達成して欲しい。ロマンチストこそリアリスト。

へひらおか よしゆき・札幌大谷大学社会学部教授